

近藤悟先生の思い出

日本福祉大学 情報社会科学部
陳 立 行
Lixing CHEN

近藤先生とは、情報社会科学部設立以来、同じ環境情報システムコースに所属しました。大学院情報・経営開発研究科の設立に伴い、リサーチ研究の体制により、経済学部の岩田先生と共同で院生の指導を行いました。岩田先生が定年した後、私は近藤先生と組んで、リサーチ研究チームの体制の下で共同で院生の指導を続けました。

こうしたご縁をきっかけに、私たち3人の教員は、前後12人の大学院生（留学生6人）を指導する中で、1999年秋に中小企業の創業と発展に関わる学際的な研究プロジェクトを立ちあげました。経済学部の海外提携大学であるマレーシア科学技術大学、中国の首都経済貿易大学の協力を得て、近藤先生は経営戦略、岩田先生は経営学、私は社会学という異なった視点で国際比較研究を始めたのです。

そのとき、近藤先生は大学評議会委員や大学院の運営委員など管理運営業務に非常にお忙しいなか、このプロジェクトのため、月一回の研究会で議論と発表に多くの時間を費やし、夏休み中は現地調査に精力的に取り組まれました。2000年私たちの研究チームは合肥の中小企業を育成するインキュベーターを訪問したことが強く印象に残っています。インキュベーターの見学を終え、先方が是非日本のインキュベーターの運営状況について紹介してほしいと言われました。このいきなりの注文に対して、近藤先生は神奈川と大分の事例を挙げながら、日本のインキュベーターの運営体制と役割を日本の経済環境とリンクして丁寧に説明され、中には中国の事情と照らしながら、合肥のインキュベーターに対する評価も交じりました。岩田先生のような中国通ならば、予想以内のことですが、近藤先生はそれまで中国が研究フィールドではなく、これほど適切な助言と評価を出来たことに対して、正直に言えば、意外に思いました。中国社会と経済に関わる知識をいつ学んだかについて非常に興味を持つようになりました。その後岩田先生から「近藤先生の祖父も父も中国文学が専攻でした」と聞きまして、なるほど「耳濡目染」（聞きなれたり、見慣れたりして、知らずにその影響を受けること）の家庭環境が分かりました。当時そのインキュベーターは合肥での初めての試みで、先進国としての日本のインキュベーター運営について非常に興味を持っていました。近藤先生の話は現場の人に大きな参考になると信じています。

このプロジェクトの最終年の2002年6月、マレーシアと中国の共同研究者を招いて、名古屋で日本福祉大学主催の国際シンポジウムを開催することができました。職員、大学院生と力を合わせて、このシンポジウムのための準備に、忙しい日々を送りました。ところが、シンポジウム開催の前日、研究チームの主力メンバーのひとり岩田先生が、外国からの客を迎えに出て、地下鉄の出口で転倒、足の甲の骨折という思わぬアクシデントに見舞われたため、シンポジウムへの出席ができなくなってしまいました。近藤先生は、私の心配する姿をみて、「大丈夫」と慰め、シンポジウムには冷静に対応してくれました。シンポジウムが成功を取めることができたのは、近藤先生のお陰と今でも感謝しています。

大学院の仕事と研究プロジェクトを通じて、私は先生と一緒に大学院生の共同指導と共同研究を行うという幸運に恵まれました。大学院生に対する厳格な訓練と暖かく優しい指導で、先生は学生に深く愛されました。また、先生の研究分野としての環境経営戦略は新しい分野で、先生の柔軟な考え方と幅広い学際的知識には驚嘆させられました。

先生の厳格な学問に対する姿勢と謙遜の人格から、私はいろいろ教わりました。先生がわれわれの教育と共同研究を大きく支えて下さったことに心から感謝しております。

心から先生のご冥福をお祈りいたします。